

日本ユネスコ協会連盟の教材キット「守ろう地球のたからもの」

その作成意図と具体的事例

山下欣浩

(鳥取県米子市立淀江中学校)

田淵五十生

(奈良教育大学社会科教育教室)

Report on Teaching Material “ Let’s Protect the Precious Treasures of Earth focused on World Heritage ”
and of its Example

Yoshihiro YAMASHITA

(Yodoe Junior High School)

Isoo TABUCHI

(Nara University of Education)

要旨：本稿は社団法人日本ユネスコ協会連盟が東京三菱UFJファイナンシャルグループの支援を受けて、「守ろう地球のたからもの 世界遺産編」の監修に関わった田淵の教材作成の基本的コンセプトと、具体的に教材キットとして山下が開発した危機遺産「コルディリエーラの棚田群の教材化 伝統文化と生活を守るため、互いに支え助け合う人々の絆の大切さを学ぶ」の「授業の流れ」(いわゆる教案)を提示したものである。特に後者は、教師がどのように授業展開をすればいいのかをつぶさに記述している。紹介した事例以外、14例が教材キットに収録されている。その教材キットをどのように使用するか参考にしていただければ幸いである。今後、他の実践事例も、本誌に掲載予定である。本誌の場合、Web上に公開されるので、日本語圏では誰でもアクセス可能であり、より多くの方々に参照していただきたいと願っている。

キーワード：世界遺産教育 World Heritage ESD Education for Sustainable Development
コルディリエーラの棚田 Rice Terraces of the Philippine Cordilleras
UNESCO(ユネスコ) United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization
教材キット Teaching Material

1. はじめに

2008年、社団法人「日本ユネスコ協会連盟」は東京三菱UFJファイナンシャルグループの支援を受けて「守ろう地球のたからもの 豊かな自然編」という教材キットを作成することになった。その自然編を担当したのが見上一幸教授を中心とした宮城教育大学環境教育実践センターの5名のスタッフで2008年12月に完成し¹⁾、現在、全国の教育現場に配布されている。今後、英語と中国語に翻訳されて世界中の教育現場に配布される予定である。

その第2編として「世界遺産」編を、本稿の共同執筆者である田淵を中心とした奈良市内に居住する小中の教員が制作し、2010年6月に完成予定である。

この教材キットは、世界遺産を後述する4つの切り口から捉えた14の教材から構成されている。冊子だけではなく、映像DVD、資料・ワークシートの入ったCDも含まれている。しかし、教材キットの場合、紙幅の制約上、解説が不十分であったり、割愛せざるを得ない資料が多かったり、そのまま授業展開できないケースが想定される。

そこで、本稿の後半では、一つの教材事例を取り上げ、執筆者がその教材キットをこのように使用していただきたいという授業モデルをそのまま示した。

まず、最初に教材キットの監修者である田淵の監修意図を二つに分けて述べる。一つは、世界遺産がESD(Education for Sustainable Development 「持続可能な開発のための教育」、文部科学省の訳語では

「持続発展教育」)に迫る有益なツールになることの指摘である。二つは、世界遺産を、人権・平和、環境の保全、文化の多様性、人間的つながり・連帯・協調の四つの切り口から捉えてESDに繋げる論拠を示したものである。

引き続き、教材キットの執筆者である山下による「人間的つながり・連帯・協調」の切り口から、フィリピンの文化遺産「イフガオの棚田」について授業展開を意識して述べている。この山下の事例を参考にして、教材キットを使用していただけたら幸いである。

2. 世界遺産はESDに迫る有益なツールである

世界遺産は過去からの単なる「遺産」ではない。むしろ我々の世代が未来の世代から預かっているものという発想に立てば、世界遺産とESDの関係が見えてくる。

2.1. 世界遺産は人類の宝物

人類の宝物として普遍的な価値を持つ世界遺産が、現在(2009年) 890サイトある。それらは、人々の歩みや文明の進歩を刻印した優れた文化遺産、地球の歴史を記憶し、生態系が絶妙なバランスで保たれてきた自然遺産、その両者を備えた複合遺産である。

例えば、インド・イスラム建築の最高傑作であるタージマハール霊廟は、どの角度から見ても完全なシンメトリーである。また、800棟もの甍が並ぶ北京の故宮(紫禁城)は、オレンジ色の琉璃瓦の屋根が波打ち、緑の庭木とコントラストをなして、上から見るとまるで絨毯のようである。

日本の青森県と秋田県の間には、豪雪に阻まれて開発の手が入らなかったために、広大なブナ林が残された。そこには、ツキノワグマやクマゲラをはじめとする多様な動植物が生息し、生態系が保たれた自然林として世界遺産に登録された。

「天空の空中都市」と呼ばれるマチュピチュ遺跡は、1912年、アメリカのエール大学出身の探検家ビルハム・ピンガムが、インディオの古老の言い伝えを聞いて絶壁をよじ登って「発見」した遺跡の一部が、半世紀後に完全に修復されて現在のような遺跡公園になったものである²⁾。言い古された形容詞「かみそり刃一枚も通さない」ほどの精巧な石造建築物を通してインカ文明の技術の高さを知ることができる。また、その周囲には、多様なランやハチドリなど、動植物の多様性が保たれた自然が豊かに残っており、人間と自然が織りなした典型的な複合遺産となっている。

時空を超えた文化遺産、微妙なバランスの生態系の自然遺産、それらは単なる過去からの遺産ではなく、我々の世代が未来の世代から預かっている「かけがえないたからもの」であり、次の世代に無傷でパトナタッチしていかなければならないと痛感させられる。

2.2. 世界遺産の危機

けれども、自動車の排気ガスや工場の排煙を含む酸性雨が、タージマハールに降り注ぎ、白亜の大理石を汚している。ヨーロッパ諸国のライムストーン(大理石)の大聖堂の石造彫刻が溶解している。いずれも大気汚染が文化遺産を傷つけているのである。一方、紫禁城では、庭木が枯れはじめている。一日最高12万人もの観光客が押しかけ、地面が踏み固められて、雨水を通さないほど堅くなっているからである。観光客の増大による景観破壊とすることができる。観光客による景観破壊は、程度の差があるものの、どの世界遺産サイトにも共通している。

白神山地では、かつて伐採したブナ林を復原するためにブナの若木を移植する植林活動が展開されている。けれども、成長の遅いブナは、樹勢の強い他の雑木に光を阻まれて枯死直前である。それが自然の摂理であり、切断されてしまった自然の生態系の回復は不可能なのである。

マチュピチュ遺跡を別の角度から鳥瞰できるスポットがワイナピチュである。そこに登山者が殺到し、自然の生態系が保てなくなりつつある。そこで、遺跡を管理する当局は、ワイナピチュへの登山者数の制限を行うようになっている。かけがえのない生態系バランスを守るための規制であるが、現在では、マチュピチュ遺跡への入山者数の上限設定さえ検討中で、そのような厳しい規制も必要だという段階にきている。

2.3. 「世界遺産条約」締結の歴史的経緯

「世界遺産条約」そのものが、「人類の宝物を守れ!」という呼びかけで結ばれたものである。1960年代、エジプト政府は増大する電力需要に応えるために、ナイル川の上流にアスワンハイダムを建設しようとした。その結果、約4000年前のアブシンベル神殿が水没の危機に陥った。

そこで、ユネスコは、アブシンベル神殿は「エジプト一国の宝物」ではなく、「人類共通の宝物」だというキャンペーンを展開して、遺跡保存を訴えた。それは、高さ33メートル、幅38メートル、奥行き63メートルの岩山そのものを移築しようとするもので、莫大な費用が必要であった。けれども、「貴重な文化遺産を守れ」というユネスコの訴えに、世界中から寄付が寄せられ、アブシンベル神殿は残った。神殿を約1000のブロックに切って、67メートル上の高台に移しかえる壮大なプロジェクトであった。このキャンペーンが契機となって、1972年に「世界遺産条約」が締結され、「世界遺産基金」が設立された。経済力や技術力が弱くて、自前で文化遺産や自然遺産を守れない国や地域の人類の宝物を国際協力して守ろうという目的からである。それが、「世界遺産条約」の本来の趣旨であり、インドネシアのボロブドゥール遺跡も、カ

ンボディアのアンコール遺跡群も「世界遺産基金」の援助で修復されたのである³⁾。

2.4. 「ESD」と世界遺産教育

現代社会の最大の課題は、「世界中の人々が、現在のみならず、将来にわたって安心して暮らせる持続可能な社会や未来」をどう実現するかである。持続可能な未来のための意図的な教育がESD(Education for Sustainable Development「持続発展教育」)である。ESDを簡潔な一言で要約すれば、「公正」(equity)というキーワードで説明できるだろう。

快適な生活、それを保障する石油や石炭などの有限な資源、美しい自然景観など、豊かな国の国民だけが独占して、他の国民が排除されるような不公正があってはならない。また、清浄な水や大気や資源を現代人だけで使い尽くして、次世代の人々が享受できない世代間の不公正もあってはならない。地球の生態系を破壊してしまつたら、取り返しがつかなくなり、次世代の人々の生存は保障できなくなる。

ESDは、「空間的＝同世代間の公正」と「時間的＝異世代間の公正」を目指す社会の形成者を育成しようとするものである。そのような文脈に位置づけると、世界遺産はESDの典型教材になる。貴重な文化遺産を次世代に伝えること、太古の昔から保たれてきた自然の生態系を守ること、世界遺産をツールに焦点化して学ぼうというものである。

「世界遺産のある地域ならともかく、世界遺産の無い地域では不可能では」という疑問が寄せられそうであるが、世界遺産がない地域でも実践可能である。なぜなら、それぞれの地域に優れた文化遺産、子々孫々に残したい美しい自然景観、すなわち「わが街の宝物」が存在しているからである。身近な地域の宝物を次の世代にどう残すかと学習を進展させれば、世界遺産教育はどこでも取り組める普遍性を持ちうるものになる。世界遺産教育は「世界・地域遺産教育」と言い換えてもいい。

3. ESDに迫る4つの切り口

この教材キットを作成するために、世界遺産をツールにしてESDに迫る4つのアプローチを試みた。第一は「平和・人権」の尊重。第二は、「環境」の保全問題。第三は、「文化の多様性」の尊重。そして、「持続可能な社会」に必須な「人間的つながり・連帯・協調」の問題である。以下の4つの切り口について解説したい。

3.1. 「平和・人権」

優れた文化遺産や貴重な自然を守るためには、平和が保障され人々の人権が尊重されなければならない。

イラクの都市遺跡サーマッラは戦火の中で放置され崩壊が進んでいる。バーミヤンの大仏を爆破したタリバン政権下では女性の人権が蹂躪されて女子の学校教育は否定され、顔と体の全身を覆うブルカ着用が強制されていた。

ドイツでナチスが政権をとった1933年、「反ドイツ」ということでユダヤ系の人々の書籍が大量に焼かれた。その「焚書」の跡地の公園に記念碑が建っているが、そこには「本を焼くものは、ついには人間をも焼くであろう」という言葉が刻まれている。ホロコーストに先立つ100年前のハインリッヒ・ハイネの言葉である。文化を大切にしない社会は人間も大切にしない。

原爆ドームやアウシュビッツという「負の遺産」を通して戦争の悲惨な歴史について学び、平和の尊さについて考えることができる。また、奴隷貿易の拠点になったゴレ島を通して人権の発達についても学ぶことができるであろう。

3.2. 「環境の保全」

近代人は、自然をコントロールするものと考え、大気汚染、酸性雨、地球温暖化を引き起こしてしまった。そして、今、やっと大切なことに気づき始めた。それは、近代以前の人々が懐いていた「人間は自然によって生かされている」という価値観である。

環境破壊の進行で絶滅してしまった動物や植物が無数にあり、現在進行形である。例えば温暖化で北極海の氷原が溶け、ホッキョクグマが絶滅危惧種になっている。世界遺産に登録されたコンゴの自然公園をはじめ、世界各地の自然遺産が危機遺産に登録されている。サイやゴリラなども絶滅危惧種になっており、次世代の子どもたちは、それらの動物を動物園でしか見ることができなくなるという予測さえもある。

自然遺産の第1号として登録されたガラパゴス諸島が2007年に危機遺産リストに登録された。ゾウガメやイグアナなど固有種が多く、ダーウィンが進化論のヒントを得た島として有名である。増加する観光客目当てに大量の住民が移住して、自然景観が変化しただけでなく、ネコやヤギなど新たな外来生物が浸入して生態系そのものが危機に陥っている。

観光客の増大による危機は日本の屋久島や知床でも起こっている。本教材キットではそれらのサイトを事例にして、自然保護と観光のあり方、自然や動物、植物と人間との深いかかわり合い(共生)について考える契機にしたいと意図している。

3.3. 「文化の多様性」

「ユネスコ憲章」の前文は、お互いの風習と生活を知らないことが、疑惑や不信を引き起こし、しばしば戦争の原因となったと指摘し、永続する「平和は人類の知的及び精神的連帯の上に築かなければならない」

と述べている。

21世紀になってグローバル化が進行し人々が国境を超えて移住するようになった。その結果、文化の異なる人々が地域社会に居住するようになり、ますます相互の文化を尊重することが求められている。

かつては世界遺産の登録においても、西洋中心の考え方があった。遺産が本物であるかどうかを判断する際に、材質が当初のものであるか否かという基準で「真正性」(authenticity)が決められていた。したがって、西洋の石の建築に比べてアジアは木を、アフリカは泥を材質にした建築が多く、補修が必要なことから「真正性」が疑われたのである。現在では、文化の多様性が認められ、アジアやアフリカの文化遺産が登録されるようになった。そのような文化の多様性が論議されたのが、1994年に奈良市で開催された「世界遺産国際会議」であり、いわゆる「奈良宣言」として確認された⁴⁾。

本教材キットでは、木の文化の典型である法隆寺、石の文化の典型であるパルテノン神殿を通して、文化の多様性について学ぶことになっている。パーミアンの大仏と奈良東大寺大仏を比較しながら、それぞれの地域・社会で培われてきた文化遺産への人々の想いに触れ、文化の共通性と個性に気づき、文化の多様性を認める心を養うことも意図されている。

3.4. 「人間的つながり・連帯・協調」

持続可能な社会とは、人間的なつながりがあり、連帯し協調しあうコミュニティーが存在する社会である。けれども、現代では、経済のグローバル化に伴う自由主義競争の結果、世界的にも国内的にも人々の経済格差が拡大して、人間的な絆が切断され、人々の精神的な孤立が進行している。

本教材キットでは、白川・五箇山とフィリピンのコルディリエーラの世界遺産を通して、世界遺産の保護・保全には、人々の協力や知恵の結集が必要であったこと、特に、共同体によって伝統文化が守られてきた経緯を確認することになっている。

冷戦終結後、各地で民族間の戦争が勃発した。特に悲惨であったのが旧ユーゴスラビアである。独立を宣言したクロアチアのドロブニク旧市街は、連邦軍から意図的に激しい攻撃を受けて甚大な被害を受けた。民族的敵意が駆りたてた蛮行である。

けれども、内戦終結後、人々は心を合わせて復興に立ち上がった。中世以来の自由を求めて団結した歴史を想起したのである。人々は、破壊された石材を積み重ねて旧市街を復興させ、危機遺産から脱することができた⁵⁾。本教材キットでは、これらの事例を通して、現代における地域づくり、街づくりの主体者は誰かという当事者意識を育てたいと意図している。

4. 「コルディリエーラの棚田群」の教材化

伝統文化と生活を守るため、互いに支え助け合う人々の絆の大切さを学ぶ

4.1. はじめに

本教材キットの「人間的つながり・連帯・協調」についての学習では、「世界遺産がなぜ大切なものなのか」という普遍的な価値が、児童・生徒一人ひとりに内面化される必要がある。

戦争・内戦や環境破壊で、危機遺産になったものは、児童・生徒に平和の大切さや環境を守ることの必要性を感じさせることは難しくない。しかし、「コルディリエーラの棚田群」のように、環境面の要素だけではなく、そこに住む人々の生活を維持する要素も考慮する場合には簡単に結論を出すことができない。「伝統や文化を守るか、物質的に豊かな生活をとるか。」この問いは、実は、他の世界遺産にも共通の問いであり、いわゆる「正しい答え」は存在しない。だからこそ、児童・生徒が多面的・多角的に考察し論議することができ、社会的な見方や考え方を養うことができるのである。

ここでは、従来の世界遺産学習を再考し、世界遺産に登録されることの本当の意味を児童・生徒に考えさせるために、「コルディリエーラの棚田群」を通しての実践を紹介したい。

まず、「コルディリエーラの棚田群」の概要や無形遺産のフードフードについて紹介し、次に危機遺産となった背景について考察を加えていく。そして、最後に、指導の実例を示し、その留意点を述べていく。

4.2. コルディリエーラの棚田群の概要

2000年の歴史を持つ棚田は、自然と人間の調和を表す文化的景観として、1995年に、世界遺産に登録された。

ルソン島北部に300kmに渡って連なるコルディリエーラ山脈の中部にあるイフガオ州には、古くから少数民族のイフガオの人々が住み、先祖伝来の文化を守り続けてきた。標高700mから1500mにわたり、稲穂の実る棚田はその美しさから、「天国への階段」と呼ばれている。これらの棚田の壁をすべてつなぎ合わせると20000kmにも達し、地球のおよそ半周に相当するといふ。

ここでは、西洋文化の影響を受けることなく古代からの伝統が守り抜かれてきた。ここに住むイフガオの人々の多くは、伝統的な木造の高床式住居で生活していた。屋根はかやの一種で葺いてあり建物には釘一本も使われていない。村の住民達は毎朝、徒歩で水田へ向かい、幅のせまい高低差のある場所での農作業を行う。水田は狭くて農機具の導入は困難で、農作業のほ

とんどは人の手によって行われる。棚田は高地に位置しているため、二期作はほぼ不可能である。耕作地に乏しいこの地方では必要な食料を手に入れるため、人々は工夫を凝らして土地を利用してきた。種まき、田植え、収穫、農閑期には田の壁や水路の補修などを行い、作業は一年中絶えることがない。棚田でとれた米のほとんどは自分達の村で消費する。しかし、現在では一年分の食料とするには収穫量が足りないため低地から米を買っているという。

田植えや収穫のときに歌われる素朴な歌として伝えられてきたのがフッドフッドである。およそ40の物語で構成され、ユネスコの無形遺産にも登録された。そして、その歌と共に、先祖伝来受け継がれてきた農耕儀式もある。儀礼を司るのは、ムンバキと呼ばれる村の呪術師である。先祖の霊魂、そして何百という自然界の霊たちを順番にムンバキが呼び出すことで儀礼が始まる。聖なる米の酒を口に運びながら豊作を願い、病から村を守るための祈りは夜を徹して続けられる。朝を迎えた村では、生贄の豚を捧げる準備を始める。「人々の嫉妬のまなざしが水田の稲を燃やす。」ムンバキの唱えるこの言葉には、この世の災いや凶作をもたらす原因の一つは、人が誰も持っている他人を妬み羨む気持ちだということ伝えてある。神々に捧げた生贄を村人全員が食べるのは、人々の間の妬みや恨みを沈める宗教的な意味が込められているのである。

しかし、こうした棚田や伝統文化を近年維持していくことが難しくなってきた。棚田での稲作には大変な労力がかかり、そのうえ収穫した米は自分達の食料となるため、収入には結びつかない。こうしたことから、現在若者達の稲作離れが進み後継者不足が大きな課題となっている。

近くの町にはホテルやマーケットもあり現金収入を得ることができる。ここでイフガオの人々は観光客相手の運転手や土産物屋の従業員として働く。街での便利な生活に慣れた若者は泥にまみれる水田の仕事には戻ってはこない。こうして、棚田の手入れをする者が減り、田は荒れていってしまう。現在3割の棚田がうち捨てられた状態にある。

イフガオの人々によって守られてきた棚田や文化は、伝統を継承して、水田での耕作を続ける人がいて初めて次の世代に伝えることができる。このままでは「天国への階段」といわれるこの美しい風景が失われてしまう。このイフガオの棚田と文化を守るために、新しい取り組みが求められている。

4.3. フッドフッド詠唱について

フッドフッド詠唱は、7世紀以前に起源をさかのぼることができるという。米の種まき、収穫の時期と通夜の時に詠われる。この詠唱は200以上もの物語と40話で構成され、すべて詠い終わるまで3、4日を要す

る。詩の全編を通して旋律は1つしかなく、地域全体に共通しており、中心となる語り手と合唱する人が交互に詠う形式で、フッドフッドの叙事詩は詠唱される。

物語は非常に表現豊かで、比喩や反復が多く、換喩、隠喩、擬音なども使われており、書き写すことは非常に困難である。フッドフッドの詩人は、民族の中で歴史家としても伝道師としても重要な立場にある。また多くの場合、中心となる語り手となるのは女性であった。イフガオの人々は母系制であるため、フッドフッドの重要な役割は妻が果たすことが多く、また夫よりも妻の兄弟のほうが、高い位置に置かれている。そのため、人類学上の記録としても、フッドフッドは高い価値をもつのである。

現在、この伝統文化について書き記した文書はほとんど存在しない。フッドフッドは人の手による米の収穫と深く結びついているが、米の収穫そのものが今は機械化されてしまった。また、かつてはフッドフッドを通夜のときの目覚まし代わりとして歌っていたが、それも今ではラジオやテレビにとって代わられている。すべての物語を知る語り部はほとんど残っていない。その上に、若い人にはこの伝統が自分たちのものだという意識がないため、フッドフッドの後継者たちは高齢者のみとなっている。

現在、フッドフッドのマニュアルや視聴覚教材を発行することによって、若い人たちにフッドフッドを教えることを支援するプロジェクトが、日本ユネスコ協会連盟の協力によって行われている。

4.4. コルディリエーラの棚田群の危機遺産登録の要因について

2004年に行われた、沖縄国際フォーラムでフィリピン国家文化芸術委員会遺産保存官である Joycelyn B. MANANGHAYA (ジョイスリン・マナンハーヤ) は、コルディリエーラの棚田群が崩壊しつつある要因を以下の8点にまとめている。この8点、一つ一つについて考えていくことで、学習はより一層深まることになると思われる⁷⁾。

4.4.1. 若者の外部への移住

イフガオの人々の生活様式は外部への移住により大きく変化している。経済的に恵まれた生活を求め、イフガオの若者が他の地域に移住していくに従って、棚田がうち捨てられる状況が見られるようになった。農業による収穫だけでは家族の年間の食料を賄うのが精一杯であり、子供の生活の向上に夢を託す両親は、勉学のため子供を都市部へと送り出すようになっていく。豊かな生活を求めることがイフガオの人々を他の地域に移住させることになり、棚田の遺棄の原因となっているのである。働き頭たるべき若者が他の地域に移り住み、農業に従事する者が高齢者のみになり、伝

統農法が徐々に衰退していく状況にもつながっている。また、フードフード詠唱についても同様に詠い手が不足する現状につながっている。

4.4.2. インフラ整備

未開発地域へのフィリピン政府の政策は、道路、水道、電気、通信といった生活に必要な物やインフラの整備を目的としたもので、ライフスタイルや生活水準の向上につながるものになっている。しかし、これが同時に伝統的な生活に影響を与えている。イフガオの若者は、テレビや通信ケーブルを通じてもたらされる現代的な文化に影響を受けようになってしまった。若い世代が外部の世界との接点を多く持つということが、他の文化に同化されてしまうことにもつながっている。

4.4.3. 棚田の物理的変容

棚田については、その物理的変化も見られるようになった。棚田の壁(垣根)の部分の強度を支える控壁(バットレス)についても、石や粘土から、作業の容易化を図るため、より強度の高いセメントが用いられるようになった。この方法は、耐性・強度という点で優れているが、同時に伝統的方法の衰退にもつながっている。さらに、山道を歩く負担を軽減すべく、棚田へと連なる道路もアスファルトで舗装されるようになってしまった。これにより、生態系の変化も心配されている。日本の多くの水田地帯でホテルを見ることができなくなり、メダカが減少している状況等、同じ原因が考えられる。

4.4.4. 水資源の不足と灌漑施設の破壊

地域住民による無秩序な森林の伐採による森林資源の枯渇も、棚田の維持に大きな影響を与えている。採石場への用途変更、彫刻材料としての木材の切り出し、造園のための樹木の伐採や焼き畑農業も、土壌浸食を加速させ、水資源に影響を与えている。これが水を棚田に適さないものに変えてしまっている。また、手入れ不足によって旧来の灌漑システムも破壊が進んでおり、これが水の供給不足につながっている。手入れが不足する理由の一つにコストの上昇がある。こうした事態が水の供給不足につながり、土地・土壌が脆く崩れやすいものとなり、用水路は浸食されていく。

4.4.5. 気候の変化

海面の水温や海流などの変動をおこすエルニーニョ現象の影響から、この地域に干ばつなどの不順な気象状況が見られる。土地の手入れがいきとどかないこともあり、干ばつは棚田の崩壊へとつながっている。干上がった棚田が雨期の間浸食を受け、棚田の側壁を崩壊してしまう。この結果、「天国への階段」と呼ばれた美しい景観を保つことが困難となった。

4.4.6. 伝統的居住様式の変化

伝統的システムに対する近代化の波は、伝統的居住様式にも影響を与えている。現在、イフガオの人々の居住は、洋風化の影響を受けている。イフガオの人々の本来の住居は、4つの壁に囲まれ単一の部屋から構成されるbaleと呼ばれているものであった。しかし、これが現代的な生活で見られる、設備の完備された複数の部屋からなる近代的な家にとってかわられた。新しい建築資材や建築方式の採用が、イフガオの人々の伝統建築に変化をもたらしたのである。家の建築資材も近代化され、稲を材料にした草葺きの屋根も亜鉛鉄板に変わっている。その結果、イフガオの人々の象徴ともなっていた伝統的住居もほとんど見ることはできなくなってしまった。

4.4.7. 動植物の森林や棚田への移植

住民の生活向上や所得の増加を目的とした、他地域の動植物の、森林や棚田への移植も問題になっている。この地域の森林とは相容れない植物種の繁殖が水資源に影響を与え、また日本のタニシといった食用目的の動物種の棚田への移植が、棚田に弊害をもたらしている。現金収入を得るために、商品作物の栽培を行ったり、伝統的な稲ではなく収穫増のための他品種の稲を用いたりすることの影響も少なくない。

4.4.8. 都市化の進展

都市化や商業化を目指した開発を規制できない不適切な政策もまた、文化的景観の破壊につながっている。地域経済を含めた未来像の描けない行政の不機能が大きな問題であるのだが、新規の建築物や未完成のビルが場当たりに散立し、かつては平穏であった当地域の森林の景観を損ねている。その元凶となっているのは、こうした開発を規制する建築基準法の不在である。保存という方針に連動していない土地用途制限もまた、景観を損ねる要因となっている。周辺地域を含めた棚田の景観が大きな価値を持っているという認識が政府に欠如している。

特に、山岳民族の生活水準の向上は、地域の文化的発展であると考えられているが、残念ながら、これは同時に、住民の固有の文化に対する誇りを失わせる結果につながっている。

以上、8点を紹介してきたが、これをどのように授業の中に組み入れていくかが、児童・生徒の話し合いの活発化を握る鍵となろう。対立する価値を並べ、それぞれの立場から意見を述べさせていくことで論議が深まっていくように指導したい。

学習展開例

	資料	学習活動	教師のはたらきかけ
導入	写真	写真を見て、気づいたことを話し合う。	発問：写真を見た感想や気づいたことを発表しよう。 地図でコルディリエーラの棚田群の位置を確認し、「天国への階段」と呼ばれるエピソードを紹介しながら棚田の美しさにも十分触れさせ、棚田が作られた理由を考える。
展開	資料 写真 ワークシート	棚田での農作業が困難な点をどのように克服しているかについて考える。 各自で予想をたてた後、資料を読んで考える。 イフガオの人々の農耕儀礼やフードフッドについて知る。	発問：棚田で農業を行っていくうえで困ること不便なことはないか考えよう。 棚田の地形的な特徴から、農作業を行う点での困難な点を簡単にワークシートに書かせた後、資料を配る。 資料から、棚田の灌漑整備や伝統的家屋の工夫、すべて人の力で行う農作業のあり方について読み取らせ、そこには村の人々の協力と努力があったことに気づかせる。 農耕儀礼やフードフッドについてただ教えるだけでなく、豊作を祈願する儀礼の意味や、村の呪術師であるムンバキの言葉から、人々の間のねたみや恨みをしずめ、互いに助け合う人々のつながりを大切にすることを読み取らせる。
	ワークシート	イフガオの人々の生活が困難になっている理由を話し合う。	発問：この村で伝統的な生活を送っていくことが難しくなっているのはなぜか話し合ってみましょう。
	写真	棚田がなぜ崩れたまま放置されているかを考える。	地域住民による森林の伐採によって、水を保つ機能が失われる点、そして、不順な気象状況による干ばつが干上がった棚田を作り雨季の水による浸食を防ぎきれない等の点が、崩壊の原因になっていることに気づかせる。
	写真 資料	新しいライフスタイルが流入されることの影響を考える。	経済的に豊かな生活を求める若者の流出や、フィリピン政府のインフラ整備等の新しい文化の流入が、後継者不足につながり、伝統的な生活を守り棚田を維持することが困難になっていることを写真や資料から考えさせる。 伝統的家屋や棚田の伝統的な工法、そして長い間伝ってきたフードフッド等の文化がイフガオの人々の間でも失われつつあることを知らせる。
	ワークシート	イフガオの人々の伝統・文化・生活を守るためにはどうすればよいのかを話し合う	発問：イフガオの人々の文化・伝統を守り、棚田の景観を維持すると共に、イフガオの人々の生活を守っていくためにはどうすればよいか話し合おう。 世界遺産を守るということは、単にその景観を守ることだけではなく、そこにある固有の文化を尊重する気持ちを持つと共に、その文化を維持しながら、生活していくための方法を考えていかなければならないことに気づかせる。
	資料	日本ユネスコ協会連盟の取り組みについて知る。 世界遺産を守っていくための人々のつながりについて考える。	日本ユネスコ協会連盟の取り組みについての資料を読み、その目標が「イフガオに伝わる伝統的知識継承の断絶を食い止め、棚田の保全に寄与する」にあることを理解する。 今までのイフガオの人々だけのつながりから、そこを大切にしようとするすべての人の新しいつながりが、棚田を守るために必要であることをおさえる。
まとめ	写真 ワークシート	私たちの身のまわりにある棚田について考える。	次時の調べ学習につなげるため、前時で各自が調べてきた棚田にも同様な問題があって、それを守ろうとする取り組みが行われていることを知らせる。 棚田オーナー制度、グリーン・ツーリズム、農業体験観光などの言葉をキーワードとしてあげておく。

4.5. 学習活動展開例

具体的な学習展開例であるが、資料の学習展開例を参考にしていきたい。ここでは、それぞれの学習活動ごとの留意点を中心に述べていきたい。

4.5.1. 対象学年

小学校6年・中学校全学年の総合的な学習の時間
中学校1年社会科(地理的分野)「世界の様々な国々」
中学校2年社会科(地理的分野)「日本の農業」

4.5.2. ねらい

イフガオの人々の伝統的文化について理解し、コルディリェーラの棚田が人間の知恵と工夫と努力によって築かれていることに気づく。
イフガオの人々の伝統的な生活を維持するのが難しくなっていることを、環境破壊による棚田の崩落・近代化に伴うライフスタイルの変化・後継者不足など様々な角度から考える。
イフガオの人々の文化と伝統を守り、棚田の景観を維持すると共に、イフガオの人々の生活を守っていくためにはどうすればよいのかを話し合う。そして、互いに支え助け合う人々の絆やつながりの大切さについて考える。

4.5.3. 単元計画

総合的な学習の時間で扱う場合は、事前学習1時間、本時1時間(2時間扱いも可能)、事後学習2時間の計3時間(4時間扱いも可能)、
中学校社会科で扱う場合は、本時のみの扱い。

4.5.4.

事前学習「私たちの身近な地域の棚田を調べよう！」

棚田は傾斜地に階段状をなし、畦畔をつけてひらかれた小区画の水田の総称と一般的には言われている。日本のようにせまい土地を農地としてきた国では、近世以前の水田はすべて棚田だったとも言え、歴史的には「棚田」と「田」の違いはないとも考えられる。明確な定義としては、農林水産省が1988年「水田要整備量調査」で対象とした傾斜1/20(水平方向に20m進んだときに1m高くなる傾斜)以上の土地にある水田を棚田とするという定義があげられる。農林水産省の示す日本の棚田百選では、36都道府県117市町村に渡って棚田があげられている。また、傾斜角度が緩やかなものも含めれば多くの地域で確認することができる。そこで、事前学習では、棚田学会のホームページなどを参考に身近にあるものを調べていく活動が可能である。身近に棚田がある地域では、実際にその棚田に出かけて行き、話を聞く活動も可能である。都市部など近くに農業地域がない場合は、社会科の学習

と連携をとり、DVDなどの視聴覚教材を使って、身近に感じさせる必要がある。事後の調べ学習とあわせて計画をたてると効果的である。

4.5.5. 事後学習

「日本の棚田を守る取り組みについて調べよう！」

棚田オーナー制度やグリーン・ツーリズムなど棚田学会のHP等を利用して調べる。棚田だけでなく、農業全体の問題点になっていることにもふれ、社会科の学習につなげることもできる。

「コンゴの5つの世界遺産が危機遺産になった理由を考えよう！」

内戦・密猟・環境破壊などによって危機遺産になったことを知り、人々のつながりや絆が絶たれてしまう戦争や争いが、私たちの大切なものを奪っていくことに気づかせることをねらいとする。この学習では、呪術師の「人々の嫉妬のまなざしが水田の稲を燃やす。」の言葉に着目して考えさせると本時の学習につながる。誰もが持っている他人を妬み羨む気持ちが争いをおこすという戒めになっていることを伝え、この言葉が表す意味を考えさせたい。さらに、互いに支え助け合う人のつながりが、コンゴの危機遺産の問題を解決していく糸口になることを伝えたい。

4.5.6. 準備物

写真 棚田の全景
写真 イフガオの人々の農耕儀礼の様子
写真 崩壊した棚田
写真 都市化した町の様子
写真 日本の棚田(自分たちの地域の近くの棚田)
資料 棚田の工夫、フードフッドと農耕儀礼
資料 棚田を維持できなくなった理由について
資料 日本ユネスコ協会連盟の取り組み
ワークシート DVD

4.5.7. 本時の指導にあたって

理解を深めるためには映像等の補助資料が役に立つ。参考映像などを効果的に利用したい。その際、本時の展開を1時間の扱いで行わず、展開の2つ目の発問までを1時間とし、後半を2時間目として十分に話し合いの時間を確保すると議論が深まる。

次に、各発問ごとの留意点を述べていく。

導入「コルディリェーラの棚田の写真を見て、自由に気づいたことや感想を話し合う。」

この活動については、事前学習とのつながりを図る必要がある。事前学習で、児童・生徒の身近にある棚田を調べさせ、棚田とは何か理解させておく必要がある。そうすることで、コルディリェーラの棚田がいか

に規模が大きく美しいものであるかを実感させたい。ここでは、棚田の美しさから、この景観を守りたいという気持ちを引き出すことができればよく、展開の活動につなげていきたい。

展開1「棚田で農業を行っていくうえで困ること不便なことはないか考えよう。」

困難な理由であるが、棚田の規模の大きさから考えさせていきたい。具体的には、棚田は高冷地になってしまうため、二期作ができないこと、農作業用の機械を入れることが難しいこと、農作業を行うために、山道を上り下りしなければならないことなどを写真から読み取らせたい。

その後、資料から、棚田の灌漑整備や伝統的家屋の工夫、すべて人の力で行う農作業のあり方について読み取らせ、そこには村の人々の協力と努力があったことに気づかせていく。

棚田の美しさは、人々の協力と努力により、自分たちの生活を守るため行われた結果生み出された産物であり、自然そのものの美しさとは異なることにも気づかせていきたい。同じような世界遺産として、日本の五箇山・白川郷の合掌造りがあげられる。合掌造りも、生活の工夫から生み出された家屋が連なることで、その美しさができあがっている。また、この生活を維持するために、一つの家族だけではなく、村全体のつながり、共同体としての機能が維持できなければ存在できないという点でも共通性が見られる。

そして、次の学習活動に入る前に、イフガオの人々の文化やフードフィッド詠唱について紹介したい。イフガオの人々の農耕儀礼や文化は、棚田での生活の工夫の一つでもあると言える。

また、他の人への嫉妬や妬みを戒めるムンバキの言葉は、現在の棚田の抱える問題点をすでに、予期し暗示していたのかもしれない。つながりが絶たれれば、イフガオの生活は成り立たないということ。

展開2「この村で伝統的な生活を送っていくことが難しくなっているのはなぜか話し合ってみましょう。」

この活動では、大きく2つのアプローチから児童・生徒に考えさせていきたい。

一つは、環境面からのアプローチである。棚田が崩れて放置されている写真を見せ、なぜ、棚田が崩れてしまったのか、修復できない理由を考えさせる。

もう一つのアプローチは、生活の変化である。イフガオの人々の村近くのにぎわう街の様子をあらわす写真を見せ、若者の移住による後継者不足の問題を考えさせていく。

どちらの側面も、先に述べた8つの危機遺産登録の要因を例に出して考えさせていきたい。

展開3「イフガオの人々の文化・伝統を守り、棚田の景観を維持すると共に、イフガオの人々の生活を守っていくためにはどうすればよいか話し合おう。」

イフガオの人々の文化・伝統を守ること、棚田の景観を維持すること、イフガオの人々の生活を守ること、この3つが共に成り立つためにはどうすれば良いのかを、ロールプレイなどの方法を使いながら考えさせていきたい。

文化や伝統、景観を守るために、生活を犠牲にすることは許されない。ましてや、その地域で実際に生活していない人々に、それを守っていくべきと強制されるものでもない。大切なものであるから、それを守るためにはどうすれば良いかと考える。

現在、イフガオの人々にとってさえ、この文化が大切なものかどうか分からなくなってきている。この問題に向き合い解決を模索しはじめているのが、日本ユネスコ協会連盟の「イフガオの伝統的文化継承プログラム」である。この取り組みは、イフガオの子どもたちに自分たちの文化や伝統を学校の中で伝えていく活動を主としている。その結果、この地域の人々に、フードフィッドの詠い手になりたいという気持ちを持つ若者を増加させ、今まで気づくことができなかった自分たちの文化の良さをあらためて認識させている。今までは、イフガオの人々だけで、この地域の伝統や文化を守り続けてきた。しかし、これまで考えてきた様々な要因により、イフガオの人々のつながりだけでは、この文化を維持できなくなっている。だからこそ、その地域の人々だけでなく、周囲の村、フィリピン、そしてアジアの国の人々による新たなつながりが必要なのである。

まとめ「私たちの身のまわりにある棚田について考えよう。」

日本の農業が抱えてきた問題は、イフガオの人々の問題と非常によく似ている。環境問題、後継者不足、農家に伝わる伝統的な祭りの衰退など。日本の国内でも課題は多くあるが、その中でも、その解決に向けていくつかの方法がとられている。棚田の保護に向けては、棚田学会などを中心に論議されており、棚田オーナー制度のような試みもなされている。また、グリーン・ツーリズムや農業体験観光も、ある一定の効果を果たしている。こうした日本の取り組みが、イフガオの棚田を守る新たな方法につながっていくことも期待できるのではないだろうか。

学習指導要領の改訂に伴い、地域の文化の良さを児童・生徒に伝えていくことが、より強調されるようになった。今まで以上に、地域の文化を伝えていく学習も増えていくであろう。

5. おわりに

2009年12月2日の朝日新聞の夕刊記事「棚田に響け子の詠唱」によれば、学校でフッドフッドの授業が導入され、フッドフッドを詠うことが、再び人々の誇りになりつつあると伝えている⁸⁾。この記事の中には、民族衣装を着て、棚田でフッドフッドを詠う子どもたちの写真も紹介されている。また、日本ユネスコ協会連盟が行う「イフガオの伝統的文化継承プロジェクト」の取り組みでも、参加した学生から、「自分たちの村には、誇りに思うべきものがたくさんある。若い世代の人々は自分たちについて関心を持たずに育っていくべきではないと思うので、私は、彼らとの橋渡し役になりたいと思っています。」という感想が寄せられている。また、この活動には日本から多くの人々が参加し、日本の人々の中にも、その文化の素晴らしさに共感し守っていききたいという気持ちが広がっている。

もちろん、経済的な問題や森林破壊などの問題は、すぐに解決できるものではない。しかし、「大切だからこそ守りたい。」という気持ちが、住民にも周りの人々にもわきあがってこなければ、世界遺産に指定されても、次世代に受け継いでいくことは困難である。

今必要なことは、今までのつながりだけではなく、もっと大きなつながりを作ることである。イフガオの村からフィリピンへ、そして日本を通して、アジアから世界の国の人々のつながりへと広がっていけば、必ず解決の方法が見えてくるはずである。こうしたつながることの大切さは、単に世界遺産を学習するだけではなく、児童・生徒の身近な問題に置き換えて考えることもできる。この教材を通して、人がつながることによって形成されたものであるならば、人のつながりによって、それを取り戻すことができるという確信を得させたいと願っている。

注

- 1) 見上一幸監修『守ろう地球のたからもの』 持続可能な社会をめざして 豊かな自然編』2008 ヨネスコ協会連盟発行
- 2) 柳谷紀一郎『写真でわかる謎への旅 マチュピチュ』2000 雷鳥社 p.167
- 3) 松浦晃一郎『世界遺産 ヨネスコ事務局長は訴える』2008 講談社 p.74
- 4) 松浦晃一郎『ヨネスコ事務局長奮闘記』2004 講談社 p.209
- 5) NHK「世界遺産」プロジェクト編『危機遺産からのSOS 歴史の爪あと、人類の愚かさ』2006 p.92
- 6) 岩本由美子「失われゆく風景コルディエーラ」『世界遺産年報2007 特集 危機遺産』日経ナショナルジオグラフィック社 p.32-37

7) Joycelyn B. MANANGHAYA 「変化する環境下におけるイフガオ族文化遺産の保護」2003年度沖縄国際フォーラム報告書『沖縄のうたきとアジアの聖なる空間』p68-76

8) 「棚田に響け 子の詠唱」朝日新聞 大阪本社版夕刊 2009年12月2日

<参考文献>

- 1) The Effects of Tourism on Culture and the Environment in Asia and the Pacific IMPACT 2008年 (UNESCO Bangkok)
- 2) 野間晴雄「フィリピン・コルディエーラ山脈の棚田と遺産ツーリズムの課題」『関西大学東西学術研究所紀要』41輯 2008 p.103～136
- 3) 熊野健「北部ルソン島イフガオ族の伝統的シャーマニズム再考」『関西大学社会学部紀要』38巻1号 2006 p.77～101
- 4) 四本幸夫「フィリピンの世界遺産観光 イフガオ州バナウエの棚田と地方民の暮らしの変化」(立命館大学平成18年～20年度科学研究費補助金研究成果報告書)